

---

# 蜘蛛の見る夢

魅蜘蛛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蜘蛛の見る夢

### 【Nコード】

N7329M

### 【作者名】

魅蜘蛛

### 【あらすじ】

半ば自業自得で死亡。そして「武装錬金」の世界へ転生。  
え？ちょっと待って。確かに面白かったけど！大好きだけど！！  
でも第二の人生を送るとしたらどうよ？  
ナチュラルに人喰いの化物がウヨウヨいるんですけど！？  
なんか性別が“男”になってたことが微々たる問題に見える…何これ。なんて無理ゲー？

嗚呼、未だ地雷が埋まっている地域で暮らす人々の気持ち、少しだけわかった気がする……orz

畜生…こうなったら、意地でも最期まで“楽しく”生きてやる!!

第二の人生をその場のノリと勢いに任せて勘で駆け抜ける! 頑張れ私!! やるぞ私!!!

亀更新な上、ちょこちょこ話が変わるかもしれません。

感想は常に受け付けています

## プロローグ(前書き)

はじめまして。

小説投稿は初めてなので、至らぬところも多いと思いますが温かく見守ってほしいです。

また、文才は無いに等しいです。

## プロローグ

諸君、私は「武装錬金」が好きだ。

たとえば、もうブームが去っていたとしても……大っ好きだ！バカヤロウツッ！！

…おーつとイケナイ。夜中だからかちよつとハイになっちゃった。いや〜なんか夜中ってテンション上がるよね！漫画読んでたりニコ動見てたりすると特に（笑）

……あー、私？私はねー、今年でハタチの女子大生。ただいま絶賛くつろぎ中。まあ、具体的には自室のベッドに寝そべりつつ「武装錬金」読み返してる。

フフ、いつ読んでも面白いよね〜「武装錬金」。特にパピヨンが  
良い。すっごい良い。…好い！  
なんかもう、Best of 変態っていうか………King of  
f 残念なイケメンっていうか………いや、残念ではないか。一応  
アレはもう完成された一つのジャンルだと思うし。  
まあとにかく、良いキャラだよな。

アニメでは益々ハツチャけてたよね〜。声優さんってすごい。

そして読み返しが一段落した私はようつべ（……）で見たアニメ版を思い返しつつウトウトしていた。電気は点けっぱなしだが

完全に寝るモードだ。朝は早めに起きてお母さんが起こしに来る前に電気を消さねば……

結論から言わせてもらおうと、そんなことをする必要はなかった。また、“私”という“ハタチ前の女子大生”が平和な日常生活を生きられたのはここまでだった。

なぜなら、突然ベッドが激しく揺れだしたからだ。訳が分からなかった。しかし、すぐに「地震」だと思い至った。…思い至ったところでどうにかなる問題でも……場合によってはあるな。

ところで話は変わるが、私の部屋について少し言っておこう。

私の部屋の家具配置は、地震対策なんて全く視野にはいれていない。おそらく、家族が使う部屋の中で最も地震をしのぐのに適していないのが私の部屋だ。

特に、ベッドとその周辺が危険だと自分でも前から思っていたほどだ。詳しく述べると、まず私がいるベッドの枕側だ。大きめのガラス窓がある。カーテンは薄手のレースが一枚きり。朝になればすぐわかる。

次にベッドの横…壁側だが、ここにはガラス戸付きの大きな本棚が置いてある。ちなみに本棚には長年かけて集めた漫画が、隙間は所々あるがみっしりとは並んでいる。さらにその本棚の上には、中学

時代に美術部で描いたキャンバスの油絵（複数）や、大判の画集、小説のプレミアムボックス（中身入り）が、最低限落ちないバランスで積み重ねられている。

まあ、そんなワケで私は、家族の誰からも「地震が起こったら真っ先に死ぬ」とからかわれていた。

…話を戻そう。

つまり私は大きな地震が起こったその時、そんな最悪の場所、最悪のポジションにいたのだ。

そして、大きな音がしたかと思ったら、私の意識は急速に遠退いていった。

嗚呼、なんてこったい。

後悔先に立たずとはホント、良く言ったもんだよ。でも

神様、カミサマ。私、まだ死にたくありません。

あきらメロン。

最後に 最期か？ 釘みーヴォイスの幻聴を聞いた気がした。  
救われねえ。爆発しろ神さま。

暗転。



## プロローグ（後書き）

ついにやっちやいました。

更新は不定期となりますがよろしくお願ひします。

## 第一話 新しい人生（前書き）

とりあえず第一話です。

コメディイ要素は全くないうえに、展開が急すぎますがよろしくお願ひします。

## 第一話 新しい人生

まさか、こんな目に遭うなんて……。

どうしてこうなった。

目が覚めて（驚いたことに目が覚めたのだ。ありがとう神さま！）  
最初に感じたのは、怪我の痛みでもなければ包帯やギプスの圧迫感  
でもなく、股間の未知なる違和感だった。

……ちよつと面貸せカミサマ。

\*\*\*\*\*

あれから1X年……。

あの時の違和感の正体は、男のシンボルによるものだった。

そう、私は転生していたのだ。……赤ん坊（性別：男）に。

糸川 イトカワ 魅雲 ミクモ、それが今の私の名前だ。

最初は夢でも見ているのかと思った。しかし、あれからもう1X年経つというのに未だ覚める気配がない。だからこれはもう現実確定だろう。

やはりあの時に私は本棚なりガラスなりが頭にでもぶつかって死んでしまったのだろうか。だったらあのおかしな幻聴にも納得がいく。なんだよ釘みーで「あきらメロン」って！どんだけ愉快的な脳の造りをしてんだよ私は！！

さらに、だ。

……別に、転生したことや、そしたら性別が“男”になってたのは構わない。しかし！

目が覚めて最初に目に入ったのが見覚えのない天井だったにも関わらず、「知らない天井だ……」が言えなかった私の悔しさたるや、筆舌に尽くしがたいものがある！！

他にも色々と言いたいところはあるが、それだけは主張させてもらおう。

前世、まだまだやりたいことはあった。だけどそれはもう、言っても仕方のないことだ。

だから今度こそ……今度こそ幸せに生きて、天寿を全うしたい。……と、ある時までには思っていた。

ところが、前世とは全く違う世界だと、気づくその時までには。

ここは「武装錬金」の世界。もしくは、それと似通った並行世界パラレルワールドなのだ。

何故それがわかったかというところ……

あれは第二の人生を歩み始めて、何年経った頃だったろう？

私は、錬金の戦士とホムンクルスとの戦いに居合わせてしまったのだ。それはもうウツカリ偶然。あの時はもういきなり人生詰んだ……って思ったね（笑）

まあ、ホムンクルスだけならここが「武装錬金」の世界だとわからなかったかもしれない。あの状況じゃ章印のチェックなんてできないだろうし。

多分、見たのが人型ホムンクルスが掌から捕食するところだったから「え、バツカーノ……？」とか思ったかもしれない。アニメでの「喰う」シーンは似てたし。うる覚えだけど。

まあそんなことがあって、私は人喰いがウヨウヨいる世界で生きていかなければならなくなると知ったんだ。

いや〜今ここにいるのってとんでもなく奇跡だよな！もう高校生だよ私。自分でも結構危険な橋渡った気がするし、そもそもリアルに第二の人生を送れること自体普通はないし！！

一度死んだ経験、そして今いる世界の危険性。それらを考えると、私の人生はいつ千切れてもおかしくないちっぽけなものだ。

だから、楽しもう。

自分が一番かわいい。自分の命が第一。それは当然。前世もそうだった。今もそうだ。

だけど、私はこの先どんな危険があろうと、それが面白そうであればガンガン首を突っ込むだろう。その場のノリと勢いに任せて。

さあて。最後まで、最期まで、楽しく、面白く、生きようじゃないか！

そうして、前世では考えられないような人生方針が決まった。

男として生きる第二の人生は思いのほか楽しいもので（靴箱に手紙バサツというフィクションでしかお目にかかれなような現象を体験した）、可愛い友達もできた。あ、ちなみに男ね。前世では

男の子の友達なんて皆無だったし、この人生でも小・中の頃は男子がガキすぎてついていけなくて一線引いちゃってたもんだから、これはかなり嬉しい。

そっいえば……ホントなら私はもうアラフォー女性か……うん、気にしちゃダメだ。

まあとりあえずは、健全な男子高校生として過ごせるよう祈るのか。

\*\*\*\*\*

「ミクモ！何ボーツとしてんだよ」

「ん？ああ、ゴメン」

もう終礼終わってたんだ。気付かなかった。  
こういうところは進歩無いなあ。前世でも高校時代、やたらと上の空だったし。

「僕との約束、忘れたわけじゃないだろうな？」

「そりゃないって、拗ねないですよ。…次郎」

「す、拗ねてなんか無いっ／＼」

「じゃ、行くっか」

ちなみにこの可愛い子は蝶野次郎。さっき言った私の友達。ヤンデレなファザコンでありブラコンだと私は思っている。ちなみに現在、私に対してはデレ期に入ったツンデレ状態だ。

そして……原作における位置づけは、蝶・メインキャラであるパピヨンに最初に喰われた人間だ。

あゝあ、どうするよ。親しくなっちゃって。

いざ原作に突入して死んじゃったとき・・・悲しく、なるじゃないか。

「コラ！ちゃんと隣を歩けといつも言っているだろうっ！！」

「んなコト言ったって…廊下で広がると迷惑になるよ」

「ならせめて前を歩け！……僕の視界から消えるなよ（ボソッ）」

かわいいなあ、もう。何その表情。唇尖らせるのが似合う高校生男子……ぐっはあ、鼻血噴いたらどうしてくれる！

そんな可愛いと、ハマっちゃっじゃん。

だから……ひどく残念だよ、次郎。



君が、近い未来に死んでしまうなんて。

前世で友達が死んだことはなかった。幼い頃に祖母が亡くなったりはしたけど、小さかったし、年に一度くらいしか会わなかったこともあつて、悲しいとは感じなかった。

「親しい人が死んで悲しい」、そんなの前世でも経験したことがない。そもそも、ここまで親しくなった友達もいなかったし。

たぶん 次郎の死も、自分の時みたいに割り切っちゃうのかな……記憶は記録になるんだ。少しもつたいたい気がする。

きっとその時がきたら悲しいに違いない。少なくともその時は悲しいはずだ。そして、その後は……ま、保留で。

その時のことは、その時になってみないと実際わからないし。つか、前に死んだ時のことすら未だによくわかってないし（ホント何なんだよ、あの幻聴）。起こってもないことでクヨクヨするより、今を楽しむ方がずっと有意義だ。

「なあ次郎お〜。私たち、ず〜っと仲良しでいような〜（頭ナデナデ）」

「……なんだよ、藪から棒にノノ」

「ん〜内緒」

「……変なヤツ。まあ、いつものことだな」

「いや、それほどでも……」

「突っ込まないからな」

「ちえっ」

さあ、楽しく生きましょう。私が死なない程度に、ね。

## 第一話 新しい人生（後書き）

ミクモは自分で落ち着いてるつもりですが、実はまだ不安定です。

## 主人公設定（前書き）

これからの話のネタバレも大量に含むので、嫌な方はお気をつけて  
暇になった時にでも読んでください。

## 主人公設定

糸川 魅雲（イトカワ ミクモ）

PROFILE（原作開始時）

- ・身長：187cm
- ・体重：74kg
- ・誕生日：7月14日
- ・星座：蟹座
- ・血液型：A型
- ・年齢：18歳

Favorite 自分 蜘蛛（モチーフ） BL

Dislike 自業自得という言葉（自分に対して使われる場合） 虫 酸味の強いコーヒー

趣味 妄想 読書 人間（ホムンクルスでも可）観察

特技 攻爵と次郎を瞬時に見分ける（後ろ姿だとちょっと難しい）  
切り替え 生存

所属 元近畿圏私立某女子大 2回生（前世）

関東圏公立某大学 1回生（現在）

## 備考

文字通り“一度死んで生まれ変わった”元・女子大生。

一回死んだ所為か凶太さに拍車がかかって、順応性がより高く、切り替えがさらに早くなっている。

元女であるため、恋愛においては精神的にはレズになるか肉体的にはホモになるかの二択。しかし本人は「好きになったらしようが

ない」とかなり最初の方で割り切っている。

ちなみに、今のところ女の子に対してアレな気持にはなったことがないので、普通に後者を行きそうな感じ。とりあえず自分が“攻め”なら一切なんの問題もないらしい。

自分がいるのが「武装錬金」の世界だと知ったときから、長生きすることよりも死ぬその瞬間まで“楽しく”そして“面白く”生きて、最期まで“幸せ”であることに重きを置くようになった。

そのため、いつだって自分の身が一番可愛いが、場のノリと勢いで危険を冒すことも多々あるという、なかなかの困ったちゃんとなっている。座右の銘は「悔いのない人生を！」と「ワールドイズマイン！」

蜘蛛のモチーフを好んでいるが、蝶野家の人々のように度を越した趣味はない。断じてない。私服はゴスペルク系が多い。

特殊スキル：心象を操る程度の能力

魅雲が魅雲たる所以。無駄に無害オーラを振り撒き、多少下ネタに走ろうとマイナスなイメージを持たれない。やろうと思えば女湯や女子更衣室だろうと普通に入って普通に出てこれるかもしれない。別名「性別を意識させない能力」

幼い頃に錬金の戦士とホームクルスとの戦いに居合わせたことがあり、それがきっかけで自分のいるところが「武装錬金」の世界だと気付く。

ちなみにその際、ちゃっかりその錬金の戦士（殉職）の核鉄を手に入れた。反省も後悔もしていないし、するつもりもない。その後、ノリと勢いで勘を頼りに武装錬金を習得した。

### 魅雲の武装錬金

名前／トリックスター（trick star）

核鉄シリアルナンバー／XCIX（99）

形状／鋼糸ワイヤ　メインカラー／漆黒、白銀

特性／グローブに付いた装置でワイヤーを精製・射出。

特徴／　精製時にワイヤーの分子構造を変化させ、太さ、長さ、強さや性質、形状を自由に調節できる。

ちなみに、魅雲は積極的に戦うキャラではありません。大抵、闘争より逃走を選びます。でも殺るときは殺る男です。せつかくの第二の人生、穢されたくはないですから（笑）

以上、増えるかもしれません。

## 主人公設定（後書き）

小説版やPS2ゲームの「ようこそパピヨンパークへ」のストーリーも書くつもりです。

ソウヤには「ミクモさん」呼びをさせて敬語を使わせたいと思っています。



## 第二話 初めて知ったこと、手に入れたもの（前書き）

お待たせしてしまってすみません！！

保護した仔猫がかなり元気になったので更新を再開します。  
書き直すまでに時間がかかりすぎですね、本当にごめんなさい。

m これからも「蜘蛛の見る夢」をよろしくお願いします。 m ( ( (

## 第二話 初めて知ったこと、手に入れたもの

今回は回想編でいこう。

諸事情により動けないもんでね。物語も動かないんだよ。

ちなみにその事情っていうのは、なぜか全裸の次郎が私を抱き枕にして爆睡してるからなんだけど……朝からとんでもなく驚いたわ。

んで。

これがまたさあ、ぎっちりがつちりホールドされてて身動きとれないんだよね。

……なんかムニツてあたってる。

ギャルゲでは朝起きたらムニツというキャラのチチなんだけど……

たとえこれがギャルゲだったとしても次郎の性別は真正正銘だ。

また、部活をやっているワケでもないのに良い大胸筋をもっている。

原作を思い返せば、病弱だったくせにパピヨンになった攻爵もイイ身体してたな。なんなんだこの兄弟。蝶野家は神秘でいっぱいなのか？……今度家に遊びに行ってみようかな。うん、そうしよう。

さて、何から話そうか。

あ、そういえば前に「幼い頃に錬金の戦士とホムンクルスとの戦いに居合わせた」って言ったよね。

気になってる人も多いと思うから、それでいこう！

あれは、まだ体育のときに女子と男子が一緒の教室で更衣させられていた頃…。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

夏休み。

私は当時、銀成市ではなくちよつとした田舎に住んでいた。小学

校へは片道1時間かけないと辿り着けなくて、引き籠りになりたいと思った回数は数知れない。

また、その小学校のプールは夏休みになると解放され、先生やPTAのママさんらの監視の下、自由に泳ぐことができた。

そしてその日、私は学校の裏山を逃げていた。

どうして逃げていたのかというと、なんてことはない。ただ、ほんの少し事が大きくなりすぎたのだ。

よく転生物で、「肉体に精神が引きずられる」というのがある。私もまさにそれだったのだろう。当時の私は悪戯や物真似ばかりしていた。

ただ、真似するのは前世で読んだモノの登場人物のことだったが。

私は乙一先生の「GOTH」が大好きだった。いや、今でも好きだけ。

そして、いや「だから」か？よく友達を巻き込んで死体の真似事をしていた。といつても、死体役はいつだって私じゃない誰かだったが。

子供は変に罪悪感があるくせにやり出すと止まらない。頭からミ

ートソース（賞味期限切れ）をかけて道路に横たわらせたりするのは簡単にできた。

だけどその日は違った。

ちよつと思ひ立つて、私は一人で死体ごっこをやった。方法は簡単。ただ、プールにうつ伏せで浮くだけ。それから息が続かなくなるまで決して身動きはせず、苦しくなったらこっそりと息継ぎをするのだ。

まったく、その場のノリというものは怖いね。

私は混乱に乗じて脱出するはめになった。

まあ、具体的にどんな事になったのかは省略しよう。

そんなわけで、私は家に帰ってかき氷でも食べようと学校から脱出し、人目に付かないようにしながら裏山を進んでいた。

まさかそこでプール以上の惨事を見るとは思わずに。

普通は思わないよねー。

\*\*\*\*\*

\*\*\*

ああ、なんてこったい。  
どうしてこうなった。

いや、原因は明白だ。

なんか賑やかだったからってその場のノリと勢いと勘にまかせて  
スツサスツサ進むんじゃないかった！

畜生！私は自業自得という言葉が一番嫌いなんだ！！（死因が  
半ば自業自得だったから）

目の前にはちょっとした広場。そこにはあり得ないモノがいた。

「どおしたあ？お前からすりゃ、俺ら動物型なんざ雑魚もいいと  
こなんだろお？」

……………しゃべった。

ちなみにソレの外見をわかりやすく説明すると、邪悪なみつばち  
ハッチ（巨大化）って感じだ。

何アレ。ホント何アレ。

なんだろう、本能的恐怖と生理的嫌悪が今同時にきてる。

よく見ると、邪悪ハッチ（仮）の他にも誰かいた。そりゃそうだ。でなかったら邪悪ハッチ（変）は独り事がデカイ、頭が可哀相なヤツになってしまう。恰好がすでに可哀相なのに、それはあんまりだろ。

ハッチ（邪）のインパクトが強すぎて影が薄かった誰かは、普通の人間のように見えた。

ただ、衣装が戦隊ものとかの普通隊員みたいだ。ほら、オペレーターとかやってる感じの。え、何。なんの祭り？

「ぐ……ゲホッ」

………瀕死だ。

最初からクライマックスだよ。この人。なんかもう、仲間に未来託してカツコ良く終わりそうだよ。人生が。

大丈夫かこのオジサン。いや、邪ハッチとシリアスに向かい合ってる時点でもう人としてダメかもしれない。

それよりもなんなんだ。このハツ（ry）とエンディング間近のオッサンは。

これ逃げなきゃ私も人生のクライマックスに突入するんじゃない……

いや、待て。

知ってるぞ。こういつ時に動くと絶対にガサツとか音が立って標的がコツチに替わる。

知ってるぞ。しかしここで息を潜めていても見つかる時は見つかる。

知ってるぞ。これは…お約束というものだ！

って、ふざけてないとパニックってアホなことやらかしそうだ。いや、なんかもう既に駄目かもしれない。

「ま、所詮はニンゲンだな。痛えだろお？俺の毒WWW」

蜂毒・・・

能力まんまだな。いや、別に良いけど。

「……………っ」ググッ

あ、オッサンが立った！

「おっ、やるかあ？」

だけどフラフラだ。足がまるで生まれたてのバンビのよう。



「まあだ戦う気かよ。諦め悪いなあ、……面倒臭え」

うつわ、ハッチ(変)の奴…今までのふざけた感じとは打って変わって、なんか怖い雰囲気になった。え、本気？とうとう本気で殺つちゃう系？

「計画実行前に見つかつちまうなんてよお、このままだとマスターに怒られちまう。けどよおテメエを殺して、核鉄持つて帰りゃあ寧ろ褒めて貰えるよなあ？つー訳でオッサンよお、俺はマスターに褒められてえんだ。だから、さ…核鉄、頂戴？んで、死ねよvv」

「ゲホッ断る！（ゼエ）オレは…（ハア）諦めん……！」

「へ〜〜えwww」

声洪いなオッサン！

つーか、え？カクガネ？……核金。いや、核鉄。

えつと……

(ぼくぼくぼくぼくぼくぼく チーン)

っ 武装錬金！！

じゃああのハッチ(大)は蜂のホムンクルスか！！

んで、オッサンは錬金の戦士!?

なんたる超展開!何、この世界ハッチ(XLサイズ)みたいなのが  
がいつばいいいの!?私の第二の人生、障害ありまくりじゃん!

絶望した!人生の厳しさに絶望した!!

そうやって私がorz状態になっている間にも戦闘は進んでく。

まずオッサンの姿が消え……え!?消えた!!!

このときは知る由もなかったが、オッサンの武装錬金は名を「ハーミット」と言い、光学迷彩による隠密調査が主な役割だったそうだ。

まあ、これを知る時またとんでもないことになるんだが、それはまた今度。

「はっ(嘲笑)んなもん!こうしまえは意味ねえんだよお!!」

そうやってデカハッチは大量の針を射出し、弾幕を作った。つて、ええっ!?まさかのミサイルばり!?なんでもアリだなホムンクルス!だけど桜花の攻撃とちょっと被ってる!!どうせならダブルニードルも出してくれ!

もうテンションが変なことになっていた。

実体験から例えるならそう……深夜に一人でアニメ・武装錬金のOPを最初に見た時の興奮に似ている。OPからトバしてたぜパッピィ。ちなみにアレ、コマ送りにして見ると凄い。皆もやってみて！

って宣伝！？

意識を目の前の戦いに戻すと、こちらもなかなかトバしていた。

簡単に言うと、オッサンは蜂ホムよりずっと人間離れたタフさの持ち主だった。

そして

「んなっ!?!」

「

!?!?!」

初めて聞いた声無き咆哮は、なんとも迫力のあるものだった。

\*\*\*\*\*  
\*\*

さく、さく、さく、

そついや蜂って、オスは重要だけど使い捨てだよな。あ、虫って大概そうか。

さく、さく、さく、とん。

オッサンは最初から最期までクライマックスだった。前世を含めても、ここまで度肝を抜かれたことはない。

まさかあんな瀕死状態のオッサンがC・ブラボーと同じ徒手空拳による攻撃をするとは思わんだろ。

まあ、攻撃特化の武装錬金じゃなかったみたいだし、当然なのかな？ホラ、錬金<sup>アソコ</sup>戦団って無茶苦茶だから（笑）

にしても片手で頭部粉碎って……強かったんだな、オッサン。見た時もう瀕死だったから勝手に弱いのかと思ってた。ゴメンおじさん。

目の前で人が死んだのは初めてだけど、大した衝撃はないな。本物の死体はちよつと凄まじいけど、正視できるくらいには余裕だ。それに、どつちかという助かった安堵でいっぱいだし。

それから罪悪感はない。私が何かできたわけではないのは明白だからだ。だけど、これ以上ないくらい感謝はしてる。

「例え相打ちでも、貴方の勝ちだよ。貴方のおかげで助かった。勝つてくれて、ホムンクルスを倒してくれて、……………ありがとう」

ついでに核鉄もありがとう。  
大事にするね。

さ、帰ってかき氷食べたらさっそく練習しよう。

あ、いけないいけない。足跡消さなきゃ。

\*\*\*\*\*

まあそんな感じで、私は自分の生きる世界の情報と核鉄をゲットした訳。

生きてるって素晴らしいって、あの時改めて思ったんだよね……………あの日の晩のキムチモツ鍋、美味しかった…。

え、ヒドイ？それに軽すぎるって？

だって、そうやって自分の中で完結させなきゃ、耐えられないじゃない。普通ならトラウマもんよ？

だから自分なりに受け入れて、割り切って、開き直って生きていくんだって。そう、決めたんだよ。

それに目の前で死んだとはいえ赤の他人だし。

あと死にざまが凄すぎてもはやハリウッドクラスだったから実感があんまし湧かないっていうか……

「んっ……………」  
「ぐっぐし

あ、次郎起きた。この話中断ね。

美人って寝起きも美人なんだな。すごい。可愛い。

「おはよう、次郎」

「んっ／＼……おはよ。……え？」

上目づかいきゃ〜わゆ〜いつて、え？

「うわあああああ！？」 ガバツ

「（ビタンツ）あでっ」（ 1HIT）

「な、ななななんで！？僕……え？なんで？？ミクモ！！」

「おお、新発見。次郎って酒入ると記憶がスッコーンと飛ぶタイプか」

ちょっと予想外。でもよし。何故なら、……可愛いから！

「そんなのはいい！それより昨日何があった！！」

「二人で酒飲んで〜〜あ、あんま覚えてないや。もう“酒が入ると脱ぎ上戸になる”でいいんじゃない？」

「軽いな！」

うーん。予想以上に大騒ぎ。

「ほら次郎、落ち着いて。深呼吸〜」

「なんで…なんでそんな冷静なんだよ…！僕は……っえっ……ひぐっ」

うおっ！？

ヤッバイ。泣かすつもりはなかったのに！

「っえええ……、えぐっ」

あ〜っ…

よし、ここは乙女ゲー作戦だ！！

ぎゅ ぽすぽす（イメージ音）

「ゴメンね次郎。ふざけすぎた。ホントごめん…」

「…ぐすっ」

「大丈夫だって、心配なんてすることないよ。」



私、何故かジャージのチャック首までピッタリだし。ズボンはハイウエインだし」

ホントなんでだろう。ダサイことこの上ないよ。

まあそんなことより、今は次郎を泣き止ませることが重要だ。

親指で涙を拭って、真っ直ぐ目を見て微笑む。……展開的にはここで目尻になり顔になりキスするもんならだろうけど、残念ながら次郎と私はあくまで親友だ。そんなことをする間柄ではない。本っつっ当に残念だ。

「……………っふふ…っ」

…ああ、やっと笑ってくれた。

前世では笑顔よりも泣き顔のが好きだったけど、嗜好って変わるもんだなあ……

「ふふっ……………ダサイ。ふふふっ」

うっせ／＼つかホントなんでハイウエイン？

「対する次郎は極限さらしちゃってるけど」

わあ~~~~~おvvv) (効果音)

「(バツ)~~~~~//」

「ふふ、ふふふふふっ」

ふっふっふ、仕返し。：大人気ないと言っなかれ、今の私はチンケなプライドに生きる男子高校生だ。

「(くすくす)なんだよ……//」

あゝやっといつも通りになった。あゝあ、この照れ笑いが、好きかもしれない。

「ん？次郎は可愛いなって」

ボスッ ( 1 H I T ! )

「むえっ」

「変なこと、言うからだ……//」

碌に力の入ってないパンチ(鳩尾にHIT)とか…そういうところが可愛いんだけどなあ。

漫画みたい。

……これブソレンじゃん。え、じゃあ何これ一歩違えばストロベ  
リー！？男同士でもストロベリーってありなのかな……

「変かな？紛うことなき本音なんだけど」

「…変／／」

「ふーん？じゃ、ご飯作るからその間に服着てなよ」

「ん……／／」

あー良かった。機嫌直って。

にしても可愛いな次郎。そして心配だ……。だって

私の言うこと、全部鵜呑みにするんだから。

あ、言っとくけど最後まではしてないよ？次郎が痛がってないからわかるだろうけど。

それに、あんまり覚えてないってのは本当。

途中、睡魔が降臨しちゃってさ……うん。ホント何度でも言うけどなんでハイウエイン。

ま、これはこれでいいか。うん、なんの問題もない。むしろいい。次郎カワイイよ次郎。

H A H A H A H A H A

\*\*\*\*\*

「卵はなんにする？」

「半熟のターンオーバー。それ以外は許さないから／＼」

「オツケ」

まあ、夜の真相はまた別の機会に、ね？

## 第二話 初めて知ったこと、手に入れたもの（後書き）

魅雲は悪い男ですがそう思わせない雰囲気を持っています。周りには天然と認識される行為も実は計算でやっています。天然の皮を被った策士、それが魅雲です。

**番外編 未来に起こるかもしれないもしもの話(前書き)**

番外編です。

相変わらずの駄文ですがよろしく願います。

番外編 未来に起こるかもしれないもしもの話

気が付いたら私は、見覚えがあるようでない、そんな所にいた。

あつれえ？私、確か次郎の家に泊まつ……たっけ？

何してたんだろう？私……

ああ、記憶が混乱してる！なんで！？酒なんて未成年だし飲んで……ないよね？

……って、どれだけ自分に自信無いの私！ちゃんと自分の行動に責任持とうよ！！

これじゃあ朝起きたら隣に全裸のお姉さんがいても文句言えないって！マジで！！

こないだなんか全裸の親友がいたし！！

まあ、“気が付いたらよくわからん場所”なんて、“気が付いたらなんか転生”と比べたらそう驚くことでも……いや、ダメだ。きちんと驚こう。でないとしてダメな気がする。

<<ひらひら>> かんびなせかいへ >>



うっわ何!?

って、私の携帯だし。……こんな着うた設定してたっけ?

<<<<ろいゝそらゝ　くりぬいたゝ　>>

「(Pi) はい、もしもし?」

『魅雲!』

「(次郎)…?いや、違う)何?そんな慌てて……珍しい」

そうだ、ホントに珍しい。私が意図的に慌てさせるのは別として、こんな風に取り乱すのは普段の攻爵のキャラじゃない。

ああ、そう……攻爵だ。

…なんで次郎だと思ったんだろう?次郎はもう……とっくの昔に死んでいるのに。

そうだ。私だつてとっくに成人している。酒は……まあ機会があれば人並みに飲むさ。

『仕事は終わったな！？いや、終わってなくてもすぐに帰って来い！おむつと粉ミルクを買ってな！！』

ぷちっ

「え！？ちよ、もしもし！」

なんなんだ……いや、だいたいわかるけど。つーか、十中八九……アレだ。

いくら蝶・天才でも、“経験したこともない育児”を最初からスイイこなせるわけがない。それに知識でもそっち方面には明るくなかったはずだ。必要ないし。

オムツと粉ミルクを調達した帰り道、私はラボと付き合いの長い同居人……つーか家主？の惨状を想像し、ため息をついた。

絶対、私が片付け任されるんだろうなあ……

\*\*\*\*\*

「ただいま。とりあえず言われた通りにオムツ（男児用）と粉ミルク買ってきたけど……ってうわあ!？」

半ば予想してたとはいえ、ラボは凄まじいことになっていた。所々にああ、頑張ったんだな、という感じの奮闘の跡がある。

ちよつと残業で帰らなかつたら家の中がガラツと変わってるとか……うーん、家庭的なファンタジー。

「攻爵？ 大丈夫……夫、じゃないな」

正直な感想を言わせてもらつと「し、死んでる……!」だ。長椅子で寝ている姿は本つつつ当に生気が無い。まあ、わかるけど。赤ん坊の相手つて疲れるよね。

「うー? あーっ! きゃっきゃっvv」

そして全ての元凶クンは調度お目覚めのようだ。

「ソウヤくーん。久しぶりーv」

最後に会ったのはまだ首がふにゃふにゃの頃だった。

「きゃ〜つきゃはつきゅふふっ」

覚えている訳でもないだろうに、この人懐っこさは明らかに父方の遺伝子だ。あれ？ゲームじゃ性格は母親似じゃなかったっけ、この子。

「帰ったか……」

そして我らが蝶人パピヨンもお目覚めだ。目に見えてげっそりしている。

体力ないもんな、攻爵。

「ただいま。かなりキてるね。大変だったでしょ、子育て」

「……ああ」

起きてても生気が無い……。相当大変だったんだな…攻爵。

「あう、ぶ〜」

「おーおー、今日も今日とて斗貴子ちゃんに似てるね君……って」

今気付いた。

ソウヤ君の前髪あたり。

前に見た時はこんな癖っ毛はなかった。

「攻爵……これって……」

「ん？ああ、蝶・オシャレな髪形だろう？」

急に生き生きしだしたし……。

まあ、ソウヤ君といえば、この“バツテン頭”だな。  
うん、前世の記憶ではそうだった。

\*\*\*\*\*

案の定、ラボの片付けを任されてしまった。まあ、いいけどね。

攻爵はソウヤ君とお風呂。片付けもうすぐ済むし、ソウヤ君は私が拭いてあげるか。

「お〜い攻爵、あがる時は言ってる〜」

〜  
〜  
〜  
〜  
〜

あ、なんか歌ってる。

『スリル〜をく〜れな〜いか〜 アッハイ になら〜』

!?

歌が、パピヨンのイメソン………っていつかキャラソンの『蝶・サ  
イコー!〜!』だ!〜!

に、乳幼児の教育にはどうかな…これ。

ソウヤ君………よく厨二病だと言われてたけど…育った環境を考  
えると、それで済んで良かったよ。ホントに。

『せかいちにか〜れいに た〜た〜かうエ〜レガンス』

『し〜〜』

ソウヤく〜ーん!?

ああ、斗貴子ちゃん。そういえば、君は攻爵に「ミクモ、くれぐ

れも頼む」って言付けてたね。そつだよね、心配だよね。カズキ君の遺伝子があるもん。攻爵に異様に懐くのは目に見えてるもんね。

…意地でも斗貴子ちゃん似の性格に育てよう。私はそつ誓った。

\*\*\*\*\*

ぱち

「あれ？」

すぐに状況が理解できなかった。

ここは……

「ん、う~~~~~。…ミクモお、朝？（ふぁ）」

「ん？ああ、まだ寝てていいよ」

思い出した。蝶野家に遊びに来て、そのまま泊まったんだっけ。あれ？布団並べて寝た覚えはあるんだけど、なんで次郎は私の布団に入ってきてるわけ？しかもがっちり抱きついてるし。……いいけど。

.....

.....

.....

ガバッ

「次郎あ~~~~~!!」

ぐりぐりぐり

「わっ…ぷ、何?」

「次郎~~~~~」

すりすりすりすり

「だから、なんなんだよ朝から……./」

文句言ってる割には満更でもなさそうですね次郎サン。



てかゴメンよ次郎！君はここでちゃんと生きてるっていつのた、  
君が死んだあとの未来を夢に見ちゃうなんて！！

ホントごめん！マジごめん！！

今日はなんでもワガママ聞いてあげるからね~~~~~！

あ、いつものことか。

ちなみに、この時の私は次郎の兄・攻爵のことを「お兄さん」ま  
たは「攻爵さん」と呼んでいた。

夢とはいえ、私はパピヨンになった彼を「攻爵」と呼び捨ててい  
ただが……

次郎への罪悪感でいっぱいな私がそれに気付くのは、これから結  
構後だったりする。

**番外編 未来に起こるかもしれないもしもの話（後書き）**

もしかしたらまた変えるかもしれません……。

### 第三話 進級 進歩（前書き）

これからちよいちよい番外編も入れつつ魅雲の高校生活を載せていくつもりです。

相変わらずの駄文ですが、よろしくお願いします。

### 第三話 進級 進歩

唐突だが、私の通う高校は学区内で学力レベルがトップクラスを誇っている。

ちなみに私がこの学校を受けた理由は、自宅から自転車で5分かからないからだ。

中学で友達には「お前、学業を何だと思ってるんだ」とか言われたが……私は前世で学び、現世で実感したのだ。学校は近ければ近いほど良いのだと！

私は今でこそ銀成市に住んでいるが、小学生の頃は結構な田舎に住んでいて……ああ、思い出したくもない。登下校、きつかったなあ……。

おおっと、話がズレた。

それで在学中の高校だが、1年生のカリキュラムは共通で、2年生から“特進コース”、“理系コース”、“文系コース”の3つにコース分けされるのだ。

特進コースは希望（つーか適正）者が多いときは2クラスできるそうだが、今年は1クラス分しか集まらないだろう。

で、今日がその希望調査の日だったわけだが……私は学業についてはちょっとのんびり行きたかったので、文系を選択。次郎は間違いないと特進だろう。うーん、ここでお別れはちょっと寂しいかな。でも仕方ない。こればかりは仕方ない。

私、前世の経験があるだけで実際の頭の程度は並みだもん。

\*\*\*\*\*

放課後。

私と次郎はいつも一緒に帰っている。

正しく言い直すと、私は自転車を押して次郎を駅まで送っている。ちなみに雨の日は私が徒歩に切り替えるだけで一緒に行くのに変わりはない。

でも、次郎が特進へ進むところはいいかないな……。何せ特進は7時間まであるのだから。

「ミクモ。コース選択、何にしたんだ？」

あれっ、なんか次郎キラキラしてる。

え、何その期待に満ちた顔！ 次郎、まさか私が特進に行くだけでも？  
うっわ言いづらっ

「ぶ……文系だけど」

ヒュオオオオ

おおっとお、なぐんか周りの温度がちょっと下がったよあ〜？  
何コレ寒い。

「……………え？」

「文系に……………」

「ハアツ！？」

怖っ。表情歪むと妙に迫力あるんだけどこの子！

ガッ

「あ痛っ（握力強っ）」

「な、なんでだよっ！ミクモ頭良いだろ！！なんで文系！？」

ガクガクガクガク

いや、頭脳レベルは至って普通。下積み時代（前世）があるだけだし……………

……………ってというかシェイクしないでっ！死ぬ！また死んじゃうっ！！

「だって勉強面倒臭……………っあぢ（舌嚙んだ）。……………落ち着けてっ」

なんとか次郎の両手を肩から剥がして揺さぶりを止めるのに成功。

うええ…死ぬかと思った。あと舌痛い。でも許す！可愛いから。

っーか次郎、手エ掴まれたまま俯いて停止しちゃってるけど、どうしよう…。

でも勉強ホントに面倒臭いし。

「……………だ……………」

「へ？」

「やだっー!!」

やだっつてアンタ。

「嫌だ、ミクモが一緒じゃなきゃ嫌だ…！」

「次郎……………」

「一緒に来いミクモ……………」

きゅっ

いや、ごめん次郎。こればかりは何かあっても譲れないっていうか…。うん、学業については友達に引きずられちゃイカンよ、マジで。

でもすっごいグラつく。何コレ可愛い。服ぎゅって掴んで肩に顔埋めるとか……ゲームならスチル出るわ。

「次郎。悪いけど、それは出来ない」

「……わかった」

「次郎……」

あれ？オカシイな……次郎にしては物分かりが良すぎる。いつもならもっと我儘を言ってくるはず。

ま、話を通るに越したことはないけど。

「ごめんね次郎、わた……僕も文系に行く……！」「……え……！？」

次郎君、君は今なんて言った！？

なんかとんでもない問題発言かまさなかった！？

「ミクモが文系に行くなら、僕も一緒に行くって言ったんだ」

すげえ問題発言キター……！！！！

いやいやいやいや、駄目だろそれ！次郎って学年……いや、学校トッブなのに！！何そんな晴れやかな笑顔してんの！？



え、コレって私の責任になんの？先生に知れたら胸倉掴まれてマジ泣きされる！嫌だよ禿げたオッサンのマジ泣きなんて！！  
ちよ、次郎サ〜ン！？

良い考えだろう？って得意気な顔も可愛いし、抱きついてきて頼ずりしてくんのも嬉しいけど……………他はとんでもなく大問題！！

あ、ここ人気が無いとはいえ路上じゃん！公共の場！！

離れて次郎！こういう事は鍵の掛かる個室でしょう！！

\*\*\*\*\*

翌日。

私は職員室へ行き希望調査書を書き直した。

もちろん文系から特進に、だ。

嗚呼、だから私は駄目なんだ。ちよっと凹む……………。

対する次郎はかなり機嫌が良い。…うん、そのまま一週間くらいは「ご機嫌でいて。

「勉強で分からないところがあったら僕が教えてやるから心配するなよ」

「ハハッ……………ありがとう」

あゝあ。やっぱり転生ってストレスになってるのかな。前世ではこんなに可愛いのに弱くは……まあ猫になら、弱かったな。別に良いけどね。勉強は……ちゃんと予習と復習すればついていけそうだし、いざとなったら次郎がいるし。

にしても、今日も今日とて髪サラサラだな次郎。撫で甲斐があるわ。

「ん……………／／」

ああ可愛い。手が勝手に髪から頬、顎へ移動していつても誰も私を責められないね。

「次郎って猫みたいだね。私ってさあ、大の猫好きなんだけど…なんか次郎がいたら今は猫飼う必要ないなって思うよ（意識：君で手一杯）」

「……………（ボツ）／／！！」

「！？」

…な、何を想像したんだ次郎。ちょっとお姉さ…お兄さんに聴かせなさい！

あ、イイコト思いついちゃった。

コース選択は妥協したんだ。良いよねえ？それくらい……ふふ、  
フフ腐腐腐腐っ！！

じゅるり

じゃ、次回をお楽しみに！

### 第三話 進級 進歩（後書き）

魅雲は基本的に次郎の我儘を聞きますが、何か別のところで取り返しています。

#### 第四話 楽しい楽しい宴です<前編>(前書き)

遅くなってすみません。

ネタはあるんですがそれを文にする才能が無いためこれから更新は不定期かつゆっくりペースでいきます。

#### 第四話 楽しい愉しい宴です<前編>

皆さん覚えているだろうか。私が核鉄を持っているということ。

小学生の時、ひよんなことから手に入れた核鉄…。

かき氷（ミルクテイー風味）を食べて、いい感じに頭がクールダウンした私は気付いた。核鉄…：使いこなすより隠し通す方が重要かつ難しい、と。

もし核鉄を持っていることがホムンクルス側にバレれば即死亡と考えて良い。

錬金戦団にバレたら？…：うん、ヤバいかな。アレは問答無用で子供を再殺しようとするような集団だ。身寄りの無い、幼い子供を引き取って戦士として育成するような施設だ。核鉄なんてオーバートクノロジーもいいところな兵器を当然のように多数所有し、さらにそれを子供に持たせてバケモノと殺し合いをさせるような組織だ。

…：さすがは人喰い共を相手取る組織。ヤバさは互角かも。

さらに言うなら、この核鉄の入手方法は錬金の戦士らしき死体から剥ぎ取ったという後ろ暗いものだ。

…：バレちゃ駄目だバレちゃ駄目だバレちゃ駄目だ！

頑張れ逃げろ隠し通せ！

…とまあ、いろいろ思うところがあったので、実際に武装錬金を試したのは核鉄を手に入れてから1年ほど経った頃だった。

うまいこと素質に恵まれていたらしく、武装錬金の発動・操作は思っていたより容易だった。

密かに憧れていた“銃”の形状じゃなかったのは残念だったけど、武装錬金は闘争本能から発した己の分身だと言っしね。ま、納得かな。

そうそう、それで核鉄の管理なんだけど…

銀成市に引越すまでは、保管も練習も問題無く出来ていたんだ…！

ああ、もう！なんなんだよ銀成市！！

L・X・Eがあるし、蝶野攻爵だっている、さらに錬金の戦士が多数派遣されてくる。迂闊に動いたら…死ぬ！！

神様、そんなに私のことが気に食わないの！？…アレ、もしかしてこれって自業自得？

Shite！だから私は“自業自得”って言葉が一番嫌いなんだって！！

畜生、なんか自分の選択した行動が後からどんどん首を絞めてくる。もう嫌だこんな人生。でも頑張って生きるもん。

“もん”はキツイか……

\*\*\*\*\*

そんな訳で気分は初期のライト君。新世界の神は目指さないけど。それに、私のはノートじゃなくて掌大の金属だから、彼の手法はあんまり参考に出来ない。

とりあえず裁縫がやたら上達した、とだけ言っておこう。

ちなみに核鉄はしっかりと肌身離さず持ち歩いてる。

もちろん、こんな恰好している今でもだ！

「魅雲それズルくないか!？」

「なんだよ酷いなあ。これは断つじてズルくない!!」

この言い掛かり野郎は“鹿目<sup>かのめ</sup>”。中学からの付き合い。女子からは「鹿目ロス」と呼ばれ、一部の男子からは勇者として称えられている。このことから、鹿目ロスの“ロス”は“走れメロス”ではなく“エロス”から取られているのだとわかる。



「何故ならこれはっ！自腹だから!!」

ドオオオオ

ッン！（効果音）

「マジで!？」

「さすがだな糸川。ちなみに蝶野のは？」

こっちは“波古<sup>は</sup>”。次郎と中学が同じだったらしい。鹿目經由で友達になって、今ではよくつるんでる。

「無論、然るべきところでオーダーメイドした!!」

「「歪みないなお前」」

なんとも言う方がいい。私はずっとこのままでいく!

\*\*\*\*\*

え？今何してるかって？

文化祭の出し物“ドキッV男だらけのメイド喫茶”の衣装合わせですが何か？

ちなみに皆がイメクラのような膝上フリフリスカートなのに対し、私のはロングでちょっと全体的に伝統的かつシンプルなデザイン。生地も良いの使ってる。

「でもやっぱズリィ。俺らこんななのにお前超ロングじゃん」

そう言っつて不届きな鹿目ロスは私のスカートを遠慮なく捲りあげた。

あらわになるドロワーズ。

.....

「いやんエツチ。鹿目クン最っ低ー（棒読み）」

「何が『いやんエツチ』だ！どこまでズルイんだよお前！俺ら中で露出最低じゃねえか！！」

「鹿目、その辺にしとけ。女子からの視線が痛いぞ」

「サイテー」 クラスの女子A

「最低」 クラスの女子B

「.....」 鹿目ロス最っつっ低「.....」

「あと言葉も痛い」

「畜生、なんで俺がこんな目に……」

「いいや鹿目、お前はよく言った！」 男子A

「やっぱりお前は俺たちの勇者だ！」 男子B

「お前ら………！」

アホ共がアホことやっている間に着替え終わった次郎が教室に入ってきた。

羞恥で真っ赤になり、プルプル震えながら。

「ミクモ…っ／＼なんで僕のだけ他よりミニスカなんだ…っ／＼」

おお、予想していたより威力がある。照れた顔と猫耳の組み合わせ、ミニスカートとニーソによる絶対領域。スカートが短いのが心許ないのかモジモジとした仕草、若干涙目での上目づかい。……素晴らしい。

あ、なんで次郎だけ段違いにスカートが短いか、だっけ。そりゃあもちろん

「その方が可愛いからだけど？」

「「「さも当然のように…！」」」

「似合ってるよ次郎。その恰好で接客の時に『萌え萌え キュンッ』とか言うんだね」

「言っかつー!」

「え〜言わないの?じゃあ『にゃあ』って言って。今」

「「今!?!」」

だって猫耳だし。鈴付きの首輪までしてるし。私、何か間違ってる?」

「にっ……、／／」

「言っのかよっ!?!?」

「ここ、教室なんだが…メイドプレイ+猫プレイ+公開プレイってお前ら……」

「諦めた方が良いですよ先生。糸川ですから」

「なんで俺が“鹿目ロス”で糸川がなんも無しなんだよ……」

外野うるさい!

「に……にゃあっ／＼」（ぴんつ）

グフオアッ！！

お、思わぬサービス！

次郎の奴、鳴き声に合わせて両手を……。ナイス猫の手！

「も、もうやらないからなっ」

「嘘だ。絶対エ魅雲に言われたらまたやるだろ」

「そついえば前に、糸川は蝶野のワガママきかされてて可哀想だつて言ってる奴がいたが…、実際は糸川がたまにする要求の方が性質悪いよな」

「本当に通したい事には絶対逆らわせないしな、アイツ……」

さて、皆さん既に予想はついているだろうが、実はこの男メイド喫茶の発案者、私だったりする。ええ、そうですとも。次郎の猫耳メイド姿が見たいばかりにやりました。

男子からのブーイングは女子に抑え込んでもらった。え？何したかって？鹿目が「喫茶店やって女子の制服はスク水＋エプロンにしたい」って言ったことを教えたただけだけど？

「次郎ってばホント可愛い……ぎゅっ　としてチュツチュVしたい」

「すればいいだろっ!?!」

「今ここで!?!」

「待て、落ち着け蝶野!そして糸川、蝶野をオーバーヒートするまでからかうな!」

「糸川ア!そういう事なあつ、鍵のかかる個室でやれっ」

「先生、その発言もどうかと!」

その後も衣装合わせは滞りなく進んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7329m/>

---

蜘蛛の見る夢

2011年2月16日02時21分発行